

平成19年度購入資料の紹介

—日本・中国の陶磁器—

山口 卓也

平成19年度、東洋陶磁器の蒐集を続けた。中国、朝鮮、日本陶磁器の系統的蒐集を意図しているが、今回は中国・日本の天目茶碗、伊万里焼水注と皿、古清水焼茶碗組を購入している。

今回購入の天目茶碗などは、社会的、文化的、宗教的な背景をもって普及したことを伺わせる事例である。どの陶磁器を鑑賞するにしても、その陶磁器が作られた時代と場所、使われる用途と社会的な背景を考慮することが求められる。

けんさん ちゅうごくそうだい へっけんしやうけんよう
建盞 (中国宋代 福建省建窯 大：高5.8cm 径12.6cm、小：高4.6cm 径10.2cm)

中国唐時代の喫茶方法は、茶葉を煮出して飲むものであったが、北宋時代には、抹茶を茶碗に入れて湯を注ぎ、混ぜて飲む点茶が、宮廷や禪宗寺院の茶礼の中心となり広まった。同時に、抹茶の良し悪しを競う「闘茶」という一種の戯が流行し、その闘茶に適した茶碗として、黒い鉄釉系の建盞けんさん (福建省建陽県建窯産の喫茶碗) が好まれ、宮廷から貴族階層、僧侶などの間で広まった。この2点は、いずれも小振りの黒釉天目形の茶碗であり、わずかに禾目のぎめが発現している。大きい方は典型的な黒灰色の素地で、小さい方は建窯では異質の灰色素地である。

瀬戸天目茶碗 (室町時代 高7cm 径11cm)

日本国内に喫茶の習慣が広まった13世紀後半に、不足する茶器を求めて、瀬戸・美濃地域で茶碗の国内生産が始まる。禪宗の茶礼が、鎌倉幕府の保護により武家社会に浸透する14世紀後半から、瀬戸地域で「建盞」を強く意識した天目形の茶碗が生産された。この作品も建盞を写した黒釉の天目形である。16世紀には千利休 (1522～91) らが、閑寂・枯淡の世界を茶室の草庵や道具類に表した「侘び茶」を開くと、瀬戸茶碗、美濃茶碗などにバリエーションが生まれ、瀬戸焼と国焼き諸窯が茶器として大きな流れを形成する。



建盞 (大)



建盞 (小)



瀬戸天目茶碗



古清水焼色絵茶碗 (江戸時代 高6.5cm 径10.8cm 5点組)

江戸時代前半、野々村仁清が御室窯で、赤絵や錦手・色絵などによばれる上絵付けを代表的な技法として製作し、続いて東山山麓の諸窯でも、これに倣った作品が多く作られたものが古清水焼とされる。東山周辺では、栗田焼や八坂焼、清水焼、音羽焼、御菩薩池焼、修学院焼などの各窯でも、緑と紺、金などの釉薬で上絵付けを行った。この色絵茶碗5点組は、金と緑、紺で松と梅が枝を絡ませる様を描いており、前には松が、後には梅が金彩されている。



古清水焼色絵茶碗



伊万里葡萄文瓢箪形水注



伊万里染付鹿文皿

ぶどうもんひょうたんがたみずさし
葡萄文瓢箪形水注 (江戸時代後期 高16.3cm 長17.3cm)

瓢箪形の注口を傾けた水注である。くびれ上部と下部にそれぞれ房のついた飾紐が一周し、装飾された持手をつけられる。口縁には欠損を補修した金継がある。緑、紺、赤などで器面に広く絵付けされた見事な伊万里焼である。底部背面には竹組が描かれており、胴部の染付葡萄と蔓文は、棚から下がった状態を描いたことがわかる。オランダ東インド会社の注文で、ワインなどの酒器として輸出用に作られたものであろう。

伊万里染付鹿文皿 (江戸時代 高2.3cm 径20.5cm)

伊万里港は、有田周辺で作られた陶磁器の出荷港として栄え、この港から積み出された陶磁器は、全国で伊万里焼と呼ばれた。特に江戸時代後期までのものを古伊万里とする。この染付皿には、中央見込みに様式化した樹木の茂る仙山の間で若鹿が2頭はね回る様子が描かれ、縁部には花草文を緻密にあしらっている。一般の流通品と比べて、皿の器形や釉薬、紋様の構成が緻密であり、藩窯の作品を写したものである可能性がある。